

書名：愛するということ

著者：エーリッヒ・フロム

訳者：鈴木晶

出版社：紀伊國屋書店

出版年月：1991年3月

総ページ数：214ページ

ISBN：4314005580



推薦者

木村直子

鳴門教育大学大学院講師

幼年発達支援コース

私が、この本を初めて、手にしたのは高校2年生のときであった。当時は、心理学に関連する領域の本を手当たり次第、読み漁っていた。今から思うと、どれだけ理解していたかあやしいが、高校生の自分は、この著書から「信頼に基づく愛について」考えていた。本書は、いわゆる古典といわれる類の本であり、医学の発展や、それぞれの分野での研究の発展によって、この本の中に記述されている事柄の事実関係が、現在のそれぞれの分野で主流とされているものと異なる部分（例えば、胎児と母親の関係や父親との関係、乳児の知覚、バツコーヘンの母権的宗教と父権的宗教）もあるが、それでも何度読み返しても読み返すたびに新しい発見があり、私はこの本を何度も読み返している。

●愛は信頼の最高位である

フロムが愛の能動的性質として挙げている4つ（配慮、責任、尊敬、知）を与えると云う意味で愛するには、成熟した人間でなければならないとし、その上で、「愛」は「信頼」というものの最高に位置するものだと捉えられている。信頼というのは、一方通行の思いで成り立つものではなく、そういった意味で、フロムのいう「愛」とは「愛」を生む力である、ということに通じると思う。そして、「愛」を「信頼の最高位」と位置付けると、兄弟愛も親子愛も母性愛も異性愛、神への愛も大枠の中ではすべて同じ基盤で議論することができると考えられている。

●子どものウェル・ビーイングを保障する援助者として

フロムが母性愛のところで述べている「子どもの生命と必要性に対する無条件の肯定」は、母性にとどまらず、まさに親の子育てや教師保育者からの教育の真髄に感じられる。子どもの生命の保護のために絶対に必要な気づかいと責任、これは子どものウェルフェアをまもるものであり、これにプラス、「生きることへの愛」「生きていることはすばらしい」という人生に対する愛を子どもに与えることが、子どものウェル・ビーイングを考えた子育てや保育・教育のあり方ではないかと思っている。

フロムは、現代社会に暮らす私たちが、「愛される」ことや「恋に落ちる」ことに関心があっても、「愛するということ」を学ぼうとしないのは、人々が成功・名誉・富・権力など現代的な利益を得るためにほとんど全てのエネルギーを使い、愛の技術を学ぶエネルギーが残っていないからだと言っている。教員や援助専門職として、市場原理からは一線を画した存在であり続けるためにも、一度は手に取ってほしい書物である。

